
とある妹達の憑依物語

烏天狗0713

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある妹達の憑依物語

【Nコード】

N2298S

【作者名】

烏天狗0713

【あらすじ】

神の手違いか、それともお遊びか、

少年は、死んで「とある魔術の禁書目録」の世界へといった。

彼は、妹達の一人に憑依した。

彼女の運命は何処へと向かうのだろうか

作者は、ド素人の超駄文です。期待に沿えることができないかも

しれませんが、

皆様が楽しめる物語を書こうと思います。

感想おまちしております。

追記：学校が忙しいので、更新が遅くなると思います。

追記2：7話 紅を一度削除致しました。

PROLOG (前書き)

最初は、妹達の一人になる少年のプロローグです。
駄文ですが、よろしくお願いします。

PROLOG

季節は、春。

天気は、晴天。

俺は、高橋 優（たかはし ゆう）

3月に中学校卒業し、春休みを満喫している。

今日は、小学校へ今年入学することになった高橋美晴と
たかはし みはる

家の近くにある公園に繰出した。

美晴は、大人になったら絶対、美人になる可愛らしい顔と白いワンピース。

そんな彼女は、俺のとなりにいる。

じつに可愛い。うん、将来が楽しみだ。

皆さんは、勘違いしているだろうが、シスコンではない。決して、

シスコンではない！！（嘘だ！！！！by作者）

普通の妹のお兄さんとして心配しているのだ。うん。

「おにいちゃん、どうしたの？はやくいこうよ！」

考え事をしていたら、いつのまにかすこし先にいた美晴が、俺を呼んでいる。

ああ、と美晴に返事をしながら、美晴のとなりまですこし急ぐ。

「とうとう、美晴も小学生か…、はやいものだな。」

「あはは、パパみたい。」

「そうか？親父みたいになりたくないなあ…」

お兄ちゃんは、と続けようとした時、

ふと、少し先でこちらの反対側の歩道から、
美晴よりちいさな歳の子が、道路へと飛び出していた。

（あ、危なそうだな。一応、声をかけておこう）

声をかけようとした時、

その奥から車が物凄い速度であの子のところへ向かってきている。
事態は急変！

俺は、全速力であの子のところに、駆けていく。
前にいる人を押しのけ、無心で走る。

あの子に届く瞬間足がもつれたそうになったが、
何とか立ち直し、あの子を歩道に突き飛ばす。

その瞬間、

体に強い衝撃が、俺を襲った。

PROLOG (後書き)

感想をお願いします。

主人公1の紹介

【名前】

高橋 優

ミサカ10039号

ユウと名乗る

【性別】

男性

女性

【年齢】

15歳

1歳？

【身長】

178cm

161cm

【体重】

60kg

45kg

【顔立ち】

中の上ぐらいの幼い感じを残す顔

他の妹達と同じ顔

【髪型】

後ろ髪を軽く束ねている

【性格】

自分より自分の周りの人を優先する、世話好き

【好きなもの】

読書、料理、子供

【嫌いなもの】

虫、私欲塗れの人、自分のことしか考えない人

【詳細】

車に轢かれそうな子供を助け、命を落としたが、
なぜかミサカ 10039号に憑依していた。

憑依時は、原作3巻の八月。

ミサカネットワークには、脳波がちがうため不可能。
彼女の欠陥電気は、レベル3。

それ以外は、他の妹達と変わらない。

原作知識なし、第一、ライトノベルやアニメなどをあまり見ない。

元の世界の家族構成は、両親と妹の4人家族。

主人公1の紹介（後書き）

設定でおかしい点があれば、ご報告いただけるとありがたいです。

1話 学園都市（前書き）

もう一人の主人公は、一方通行編が終わってからです。
とりあえず、お楽しみください。

1話 学園都市

暑い。

蒸し暑さで俺は、目覚める。

太陽の光が眩しい。

眩しさで目を開けにくいが、

場所を確認するため、目を頑張って開けてみると、

そこに広がっているのは…緑。

木々がすこし並んでおり、涼しさを感じることができるが、

今、俺がいるところは、レンガの道にあるベンチに座っている。

(あれ、なんでこんなところに？っていうか、暑くね？)

おかしいのだ、最近の地球は、温暖化が進んでいるが、

春でこんな蒸し暑いはずがないのに、

夏の真っ盛りの暑さを俺は感じている。

どういうことだろうか？

第一、こんな場所など来たこともないし、

遊びに行ったことがない。

もうひとつ、少量の木々の向こうに広がるビルの数々が見える。

俺が住んでいるところは、こんな都会のところではなく、

ベットタウンのはずだ。

なのに、なぜ？

いや、そのまえに、俺は生きているのか？

あの子を助けるため、車に轢かれたはずでは？

俺が生きているとしても、おかしい。

あの衝撃は、多分轢かれたからである。

なのに、公園のベンチに放置？

周りに人がいたはず…ありえない。

まず、俺は、体のどこからも違和感を感じない。

（ん？いや、あるところがないかんじがする…）

そつと、違和感を感じるところへと、手を伸ばすと…

…その先には、灰色のスカートらしきものがあつた。

「はあ？ なにこれ？」

俺にそういう性癖などない。

ここは、男がスカートを穿く国でもないと思う。

なら、なぜ？隠れた性癖か？ありえない。

とりあえず、その先の違和感を確かめよう。

俺は、スカートの上からそつと、違和感を感じるところに手を置いた。

（あれ？まさか…）

ない。

男として、あるべきものがない。

ありえない。

ありえない、ありえない、ありえない。

「はあ！？どういうことだこれ！？」

よく見ると、俺の服装は、女学生そのものの格好である。

半そでのブラウスにサマーセーター、灰色のスカートを着ている。

「事故ったせいで、性転換ですか！？意味わかんねえし！」

落ち着きを取り戻せない。
ふざけている、こんなの夢だ、幻想だ。
そうだ、そうに違いない。
俺は、そう思ったかった。

だが、現実には、そう甘くはできていないらしい…

夢と確認するため、皆がするであろう、頬をつねるといった行為をした。

痛みを感じないはず、そうに違いない。
この暑さも、単純に死に掛けているだけの暑さだ。

（いや、待て待て！死に掛けてって、不吉なことはやめとこう）

それでは、自分が生きる可能性を失う。
今は、とりあえず、頬を抓ろう。

（頬をもって、最大限、抓る！）

俺は、思いつきり頬を抓った。
そして…

「いつてえ、嘘だろう？これが現実なんて！？」

頬に激痛が走った。痛かった。
痛みを感じるということは、夢ではない？
死後の世界でもない？
生きている？

（…ふう、落ち着け俺。）

単純に性転換しただけで、顔などは、さほど変わっていることないだろう。

その前に、必要があつたかは分からないが…

とりあえず、生きていることに感謝しよう。これで、家族にも会えるのだろう。

友達たちとも会えるだろう。

生きている。それだけで十分であろう。

そう切りかえるととりあえず、場所を確かめるため、近くの人に聞こう。

（目標は…）

確認するため、ベンチから立とうとするとときに気づいた。

俺が座っていたとなりに、ゴーグルらしきものがあつた。

ゴーグルといっても、軍用みたい感じボディである。それが、おれのとなりにある。

どうしようかと考えたが、誰かの落とし物かと考えていたが、

（落とし物にしては、これはないだろう…）

さすがにこんな大きいものを頭に着けて持ち歩いたりしないであらう。

なんとなく、もらっておくことにした。

誰からのプレゼントだったのかもしれないからである。

もちろん、俺の向けての。

ゴーグルを左手に持って、ベンチを立つ。

ここらへんを回っておくか、それとも、すこし移動するか、と迷ったが、

待っていても、暑いだけなので、少し移動しようことにした。

歩いている途中、青髪のピアスをした高校生らしいお兄さんと出会った。

（大きいなあ、180ぐらい？）

とりあえず、ここがどこかと聞こうと話しかけてみる。

「あ、すいません。ちょっと聞きたいことがあって…」

「うん？どしたんお嬢ちゃん、ボクになんかようかあ？」

なんか、笑顔になってる。

最初、すこし怪しかったけど、優しいお兄さんでよかった。

「その…迷ってしまつて、ここがどこか分らないんです。」

安心して、優しいお兄さんに聞いた。

「あら、迷子さんかいなあ…うん、ボクに任せといてえ。」

ここはな、第七学区にある公園なんやでえ。名前、忘れたけど。」

分らない。

それだけじゃ、ここがどこかわからない。

「あの、第七学区って、何のことですか？」

「ありゃ、まさか君、学園都市来よったばかりなん？せやから、迷ったんかあ、」

ふふふ、お兄さんにまかせときいゝ。」

なんだかよく分からないが、とりあえず、お兄さんにいろいろ助けてもらおう。

1話 学園都市（後書き）

結論：青髪ピアスの喋り方難しい。

青髪君が予想以上に難しかった。似非関西弁難しい。

おかしな点などあったら、ご報告いただけるとありがたいです。
感想お待ちしております。

・追記

すこし、青髪君の台詞を直しました。

2話 第七学区 前篇（前書き）

短めです。

とりあえず、投稿しておきました。

2話 第七学区 前篇

side青髪ピアス

暇や。

しかも、暑い。

もう帰ろつかいな？歩いっても意味ないし。

（いやいや、素敵な出会いがボクを待つとるかもしれへん！頑張ろう）

いや、でも…とボクの頭の中で、もうひとりの自分と論議していると、

「あのー、すみません。ちょっと聞きたいことがあって…」

一人の可愛い女の子が話しかけてきた。
なんと、ボクにもフラグが来よった！

（かみやんだけかと思っていたけど、ボクも、春がきたんや！）

そう考えるだけで嬉しくなってきた。

女の子の姿は、短髪に切った茶髪に半そでのブラウス、その上にサマーセーターを着ていて、灰色のプリーツスカートを穿いていた。

（あら、常盤台中の娘かいなあ。まあ、関係あらへんけどね！）

女の子の顔は、ちょっと困っている顔をしている。

その顔は、一般的な女の子に比べて、可愛らしく整っている顔。
（ここまで、たったの0.5秒。なんとはいy作者）
ボクは、自然体に、なおかつ、怖がられないような笑顔をして、
返事をした。

「うん？ どしたんお嬢ちゃん、ボクになんかようかあ？」

「その…迷ってしまって、ここがどこか分らないんです。」

それは、大変だ。

確か常盤台中の寮って、結構厳しいって聴いておるけど…

うん、ボクが助けてあげよう。

そうすれば、勝ち組の階段を登れるかもしれへん！

「あら、迷子さんかいなあ…うん、ボクに任せといてえ。

ここはな、第七学区にある公園なんやでえ。名前、わすれた
けど。」

女の子は、まだ困った顔している。

（あれ、どうしたのやろう？）

第七学区って言えば、多分大丈夫やろうと思ったけど…

まさか…

「あの、第七学区って、何のことですか？」

やっぱり、学園都市に来たばかりの娘かいな。

ここは、第七学区について教えといったほうが好感度があがるやろ
うな。

「ありや、まさか君、学園都市に来よったばかりなん？せやから、迷ったんかあ、

ふふふ お兄さんにまかせときいゝ。」

よし、これでボクも、勝ち組の階段を登れる！！

S i d e
e n d

2話 第七学区 前篇（後書き）

関西弁が難しいので、

関西弁に変換してもらったことができるサイトを多用させていただいています。

感想お待ちしております。

3話 第七学区 中篇（前書き）

なんかおかしいかもしれませんが、
お楽しみください。

3話 第七学区 中篇

Side ユウ

助かった。

公園で、出会った優しいお兄さんは、青髪ピアスというらしい。
何故か名前を覚えてもらえなかった。
何でだろう？

よくわからないけど、気にしないでおう。
次から、優しいお兄さんのことを青髪さんって呼ぶことにしよう
と思う。

青髪さんは、ちょっと不自然だけど、優しい笑顔でいろいろ教えて
てくれる。

青髪さんの話をまとめると、

・ここは、学園都市の第五学区ということ。

・学園都市の人口の八割が、学生らしい。

・20年ぐらい科学が進んでいるらしい。

・第七学区がもっとも施設が集中しているらしい。

という感じである。

これからまず分かることは、俺の知っている街ではないということ
と。

それと、俺がいた日本とは違う場所だということ。
二つ目は、俺が気を失っている間に時が進んでいき、
いつの間にかここに居たという可能性もあったが、

青髪さんが俺のことを「お嬢さん」と呼ぶということは、あまり歳をくっていないと分かる。

そして、数年でひとつの都市がここまで発達するわけがないと思うので、

俺の知っている日本ではないことが分かる…

自分で考えたことだが、もう冷静になれない。

（もう無理だ。こんな馬鹿なことがあつて堪るか…）

ありえない、もう家族…親父と母さん、美晴に会えないなんて…考えられない、俺がちがう「俺」になっていることが…

体の奥から来るいやな感じが、だんだん込みあがってくる。

今俺がいるところは、コンクリートの歩道の上。

ようするに他の人が通る道でもある。

こんなところで吐いたら、

他の人が迷惑極まりない…

情けないが、青髪さんに頼ろう。

頼るため、声をかけようと思ったが、

様子がおかしい俺に気づいて、

「ユウちゃん、大丈夫か？なんや、気分悪そうやけど…」

「すみません、近くにトイレがありませんか？…すこし吐き気が…」

「まじか…ほな、急ごうか、あそこのコンビニの使おうか…」

やっぱり優しい、よかった青髪さんで…。

「はい…ありがとうございます…」

「そうかあ？まだ具合悪いなら言つてなあ。」

なんか、青髪さんって、お兄さんみたい…。

美晴もこんなかんじだったのかな？

……吐き出した後、鏡に映った俺は、やっぱりちがう「俺」…、肩まである茶色い髪に、将来美人になりそうな整った顔があった。ここまできたら、認めるしかない。

俺は、この娘の魂を追いつ出し、居座ってしまった…

罪かもしれない、だが、無意識に起きたこと…

だからこそ、そのことを戒めながら、生きていこうと思う。

憎まれているかもしれない、いや、憎まれているだろう…

自分の人生を奪われたのだ、俺が生きたいばかりに。

だから、戒めて生きる。この娘の分だけ必死に生きていこうと。

「ふふ、青髪さんって、お兄さんみたい…」

「おふう、ええ笑顔や…」

なんだか、吹っ切れた。

楽しく生きていこう。

それだけを考えよう、今は。

3話 第七学区 中篇（後書き）

皆、普通に憑依しちゃっているけど、
実際に憑依してみるとこんな感じかなと
思って、書いてみました。
おかしいかもしれませんが…

って、あれ？

青髪君、変な方向に勝ち組フラグ？

番外編（前書き）

本編に関係ない話です。

高橋 優の元の世界の話です。

読まなくても、関係ありません。

おかしい点があるかもしれませんが、
どうぞお楽しみください

番外編

「ひさしぶり、お兄ちゃん。」

私は毎月、お兄ちゃんのところへ行く。

お兄ちゃんの眠っているお墓に……

お兄ちゃんが死んでから、長かった10年……

お兄ちゃんが果たせなかった高校も、入学してから卒業まで終わった。

最初は、悲しくて、苦しくて、助けたその娘もいまでは友達……
本当は、許せなかった。

なんで彼女が生きてて、お兄ちゃんが死んだのか……

彼女が居なければ、あんなことにはならなかった。

私は、彼女を憎み、殺したかった。

(でも、冷静になって考えたの……それじゃ意味がないって)

彼女が生きてるのは、お兄ちゃんのおかげ……

なのに、殺しちゃったら、お兄ちゃんのことが無駄になってしまっ。

むしろ、あの娘が苦しんで、いじめられて、自殺とかしないように、

助けなきゃいけない、彼女を。死んだら、お兄ちゃんのこと
が無駄だ。

だから、友達になった……

最初は憎かった、私に笑顔を見せる彼女が……

でも、我慢した。

我慢した。

そして、だんだん憎しみが消えていった。

「本当の友達」になれると思った。

だから、高校生になってから、ある日。

全てを彼女に言った…

彼女は、泣いた。そして、彼女も私に本心を言ってくれた。
彼女も怖かったのだ、私が…

それから、私達は、「本当の友達」になった。

「それでね、お兄ちゃん…」

好きな人ができた…

私のことを理解してくれる人…

すこしおにいちゃんに似てる人の事を好きになった。

「お兄ちゃんぐらにかっこよくないけど。」

でも、いつも笑わせてくれたり、慰めてくれたり、
友達との関係も告白したら、受け入れてくれた。

お兄ちゃんに似てるとも言った。

受け入れてくれた。

好きだといった。

彼も好きだといってくれた。

それだけでうれしかった。

私よりも、どじでかっこ悪いけどね…

「お兄ちゃん、私は元気だからね…」

もしも、お兄ちゃんにまた会えるなら…
抱きつきたい、昔みたいに。
でも、もう無理…
なんか悲しくなってきた。
涙が出てきた。
誰かに見られたらどうしよう…
でも、涙が出る。

泣き終った。
散々泣いた。

「そろそろ行くね、お兄ちゃん。」

明日も、大学にバイトがある。
他の日も、彼とのデートもある。

今を生きている。
だから、私は行く。
明日へ…

「じゃあね、お兄ちゃん。」

立ち上がったときに、風が私に当たる。
狙ったように…

「ふふ、お兄ちゃんだったたりして…」

ありもしないことだけど。

お兄ちゃんがもし、どこかで生きているなら伝えたい。

「私は、幸せです。だから、お兄ちゃんも幸せにね」

私は、そう伝えたい……

番外編（後書き）

どうでしたか？

ありえない話かもしれませんが、

高橋 優の妹 美晴が幸せになるために
書きました。

そのままじゃ、彼女がかawaiiそうだと思って

これって、短編のほうがいいですかね？

4話 第七学区 後篇（前書き）

やっと、本編に介入：

4話 第七学区 後篇

紅く染まった空。

いつの間にか、夕方になっていたようだ。

「ユウちゃん、第七学区のことを分かった？」

「はい…その、ヘアゴムを買ってもらっただけじゃなく、お食事まで…ありがとうございます。」

「別にええよ、ボクは、ユウちゃんのお兄さんやし！」

「はは、それでもありがとうございます。」

あれから、青髪さんといっしょにセブンスミストに木の葉通り、コンサートホール前広場などを回った。

その間で、俺が肩まである髪を邪魔だと思ったのを青髪さんが気づいて、

ヘアゴムを買ってもらえて、正直、嬉しかった。

その後に、そこら辺のファミレスでご飯を奢ってもらった。

今日は、青髪さんにいろいろ迷惑かけた。

(…どうやって恩返ししようかな?)

今から、恩返しすることはできない。

……

自分の身元とかが分かった後に、恩返ししよう。

「あの…青髪さん？」

「うん？」

俺は、連絡先を教えてもらってから、後日に恩返しをしようと思
う。

「その…今日の恩返しをしたいのですが、今はできませんから…
電話番号とか教えてくれませんか？」

「な…何、やと…」

驚いてる。
やっぱり失礼だったかな？

「あ、いやでしたね…」

青髪さんの気持ちを考えて無かったかも…

「あああ、いやいや、ちやうちやう、ちやうねん。

驚いただけや！女の子からだったら、大歓迎や！」

本当かな…

本当は、嫌なんじゃないかな…

「…本当にですか？」

青髪さんは、今日ずつとしてる笑顔を見せながら、

「当たり前や、嘘だと思うかあ？」

本当だ、嫌そうじゃない…
良かった、嫌われてないだ…

「じゃ、携帯を出してと…」

（あ、俺、この世界じゃ、もってないや…）

どこかの電話を貸してもらってしかなさそう…
うん、それしかない。

「すみません…携帯持ってないんです。

どこかで借りて電話しようと思います…」

「あらら、なら、しゃーないなあ。

ちよっと待っておくれや。」

青髪さんがどこから出した紙になんか書き、
それを俺に渡した。

「はい、ボクの電話番号。いつでも電話してなあ。」

「…ありがとうございます、かならず電話します。」

恩返しは、しないといけない。

（って、いうか、本当に暗くなってきたな…）

そう、もう夜が近い…

そろそろ帰らなければ…どうしよう？

俺は、自分の家知らない。

どんな風にいくのかも知らない…
やばい、またピンチになった。

「ほな、行こうかぁ。」

「え、どこに？」

まだどこか回るのだろうか…
俺は、いいけど、青髪さんに迷惑では？

「どっつて、君の寮や。」

「あ、ああそうですね。ありがとうございます。」

良かった。
寮があるんだ…
とりあえず行こう。

- - -
- - -
- - -
- - -

「ほな、バイバイ。」

「はい、さようなら。今日は、ありがとうございます。」

青髪さんに寮まで送ってもらった…

ここまでくれば、何とかなるかもしれない。

(とりあえず、寮の中に入ろう…)

俺は、ドアを開けようとした。

その瞬間、ドアの向こうから音が近づいてくる。
人が来る気がして、さっと後ろに下がった。

すると、いきよくドアが開き、誰かがこちらに走ってくる…

「ちよっ、危ない!…」

「うおお、ぶ、ぶつかる!」

そのまま、地面にうしろから落ちていく…
そして、背中に強い衝撃。

「あ痛た!…!」

「わ、悪い、すまな…い、って、御坂!」

俺を押し倒してる体勢で名前を言ったのは、
青髪さんと同じくらいの歳の男の人。

(…名前?…それがこの娘の名前?)

もしかして、この娘の名前を呼んだのか?
知り合いなのだろう…

とりあえず、退いてもらいたい。

「あの、お兄さん…退いてくれませんか？」

「あ、ああ、悪い、退く。」

お兄さんが退いて、手を貸してくれた。
とりあえず、手をとって、立つ。

「…ありがとうございます。」

「ああ、というか、お前…御坂妹？」

（御坂妹？姉妹でもいるのだろうか？）

この娘を知っているようだ。
彼にきいてみようか…

「あの、俺、ううん、私をしっているのですか？」

そしたら、彼が驚き、

「…どういうことだ？ 御坂でも、御坂妹でもないのか…」

なんか、ややこしいことになってきた。

「とりあえず、急いでるんじゃないのですか？私に関係あるのですか？」

「ああ…とりあえず付いてきてくれ！」

（悪い人には、見えないけど…）

とりあえず、付いていこう…

4話 第七学区 後篇（後書き）

どうでしたか？

やっと介入することができます。

急いでる時の上条さんって、これでよかったですね？

感想お待ちしております。

5話

絶対能力進化

LEVEL

6

SHIFT

(前書き)

やっとアクセラレータ編 終盤。

お楽しみください。

俺は今、ツンツン頭のお兄さん 上条 当麻さんに、付いていてる。

上条さんが言うには、御坂 システム 美琴さんという少女の細胞を使って、妹達というクローンを2万人作ったというか、生まれた。

彼女達を一方通行という学園都市最強のレベル5によって、殺害して、

レベル6となる、ふざけている計画。

それを阻止するために、御坂さんが研究所や関係施設を襲っているらしい…

それでも、止まらない。

上条さんは、御坂さんを助けるため、急いでいる。

(俺にできることがないのか?)

驚いている。

この学園都市は、超能力を開発してることが…

俺のいた世界では、考えられないことばかり。

でも、上条さんは、ふざけている様子などない。

御坂さんを助けるため、走っている。

全部、事実だろう…

俺も助けたい…そんなことを思っていると、

俺は、なにか感じる事ができた。

存在が大きいもの…

(これって…あ、もしかして…)

会ったときに、上条さんが俺のことを御坂さんや、妹達と間違えた…

（この娘は、妹達…同じ能力だから分かるのかな？

…とりあえず、上条さんに報告しよう。）

俺は気づいたことを上条さんに報告した。

「！それがあつたか…どっちだ？」

「ええと、あつちだと思います…」

俺は、大きな存在の方向を指で示した。

その先には、風がないのに回っているプロペラが回っている…

「あつちだな、分かった。いくぞ！」

それでは、効率が悪い。

間に合わなくなってしまうかもしれない…

二手に分かれよう…

「あの、二手に分かれましょう…」

多分、今でも、計画が実行中だと考えられるから、

一方通行を俺が時間稼ぎをすれば、彼女達を助けることができるかもしれない…死ぬ可能性がある。

でも、助けたい！

「はぁ？なんで！」

「その計画が実行されていると思うのです。だから…」

ええと、私が探そうと思うんです。

私だったら、探すことが出来ると思いますし…」

「だけど、それじゃ、危ないだろ！」

それは、分かっている。

分かっているけど…

「…それでも、彼女達を助けたいんです。」

殺されるために生み出されるなんて、おかしい…

彼女達を助けたい…

だからこそ、俺が頑張らないと…

「…わかった、でも、死ぬなよ。」

よかった、上条さんが理解してくれた。

「あたりまえです。死んでたまりますか。」

俺達は、それから二手に分かれた…

妹達を助けるため……

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

Side 一方通行

「午後八時二九分、四五秒、四六秒、四七秒

これより第一〇〇三二次実験を開始します、

被験者アクセラレータは所定の位置に着いて待機してください、

とミサカは伝令します。」

乱造品が淡々と告げた。

どうやって、殺そうか…

楽しめる殺し方を考える。

（血の逆流は、やったしなア…撲殺か？）

一万も殺せば、つまらなくなる。

話しかけてみても、会話が成立しない…

いつも変わらない反応…

つまらない。

（どオしてやるオかなア…ン？どういうことだ？）

俺が疑問を思わせる原因は、ひとつ…

「おいおい、一人じゃ勝てねエからって、二人がかりですかあ？

意味ねエよ。」

「なにを言っているのですか、とミサ…え？」

乱造品がやっと気づいたみたい。

ポンコツ品だな。

「なんで、いるのですか？ 今日の担当は、このミサカです、と
ミサカは何故、ミサカ 10039号がいるのか、疑問を抱きます。」

やつの後ろにまた一個、乱造品がいた。

(10039号ねエ、間違えたっていうこともねエしなア)

その顔は、今までの無表情な乱造品とちがい、怒りに満ち溢れている顔している。
なにかちがうようだ。

「お前がアクセラレータか…この計画をやめさせてやる！」

計画をやめさせる？
ということは……

「俺をたおすってことかア？…ハッ、おもしれエ、二人がかりで来い！」

肉片に変えてやるよオ！」

おもしろい。

なんだか今日は、楽しめそうだ…

S I E D e n d

5話

絶対能力進化

LEVEL

6

SHIFT

(後書き)

どうでしたか？

アクセラレータの口調をこれでもいいのかわかりません。

感想お待ちしております。

6話

一方通行

アクセラレータ

前篇（前書き）

おかしい点があれば、ご報告を…

お楽しみください。

6話 一方通行 アクセラレータ 前篇

Side ミサカ 10032号、御坂妹

「俺を倒すってことかア？…ハッ、面白れえ、二人がかりで来い！
肉片に変えてやるよオ！」

一方通行が、顔面を引き裂くような笑みでミサカたちに言う。
だが、それより気になったのがミサカ10039号の事だった。

（あのミサカは、ミサカではない？
とこのミサカは、ありえない想像を考えます）

ありえない。

もしお姉様の秘密の姉妹だとしても、
あの頭に着けている電子ゴーグルをなんと説明すればいい？
他のミサカにもらったというのか…ありえない。
一応、他のミサカに聞いてみよう……

『すこし確認したいことがあります、とミサカ10032号は
他のミサカに質問があります。』

ミサカネットワーク。

これが、ミサカたちを繋ぐ…

『何のようですか？ とミサカ10033号は、

ミサカ10032号に驚きつつも返事をします。』

本当は、必要ないが…

『ミサカ10039号を見かけませんでしたか？ とミサカ10032号は、

第一〇〇三一次実験のときに居なかったミサカ10039号に

ついて聞きます。』

『いいえ、見かけませんでした、とミサカ10033号は、業務を怠ったミサカ10039号に怒りを抱きます。』

やはり…では、ミサカ10039号本人に聞きましょうか…

「え…」

つながらない。

テレパシーを送ろうとしても、つながらない。

どうということだろうか？

「一方通行、すこし時間を貰えますか？ とミサカは、

ミサカ10039号とすこしお話があるので、許可をもらいます。」

許可をもらえるか？

彼は、このまま続行してしまう可能性がある…

「ああ？……ああ、そオいうことかア…

いいぜエ、はやくしやがれ。」

事情がわかったのか、彼は許可をくれた。

「ありがとうございます、とミサカは、

いそいでミサカ10039号のもとへ行きます。」

「え、どうということ？俺、わかんないんだけど…」

やはり、ミサカではない…

何かの影響で、別人格になってしまったのか？

「いいですから、来てください、とミサカは、

ミサカ10039号の腕を持って、強引に引きづります。

」

「え、ちよつ、待って…」

S i d e e n d

S i d e 一方通行

「なるほど、なるほど…そということかア…」

俺の予想では、あれに別人格が入り込んだか、それとも、

二重人格になったか…

だが、それは関係ない。

「…ヒヒ、やっとおもしろそオなのが来たじゃねエか。」

俺に対して、真正面から宣戦布告…

学園都市最強の俺に、第三位の乱造品が？

「面白れエな…殺し甲斐がある。」

…決めた、今日の殺し方。
いたぶり続けて、だんだんと殺そう…

「あの自信気な顔を、男が喜びそオなアへ顔にしてやるよオ！」

楽しみだ…

そして、

ドオン…！

大きな音が響いた…

（ン？…なんの音だ？……まア、関係ねエな。）

今は、こちらの方が気になる。

S i d e e n d

S i d e ユウ

やっぱり、俺は妹達の一人だったみたいだ。

（予想はしてたけど……超能力も使えるみたいだ…）

能力は、発電能力…

大体、五万ボルトらしい…

（五万ボルトって言っても、結局電流だし…関係ないなあ。）

第一、ミサカ10032号さんが言うには、

あの男、アクセラレータには効かないらしい。

なぜかというと、

あの男は、あらゆるモノのベクトルに触れたただけで
変換することができるらしい…

（化け物じゃん…外見的にも怖いけど…）

外見も、

髪が白い。

肌も白い、全世界の女の子が羨むだろうぐらいに。

白いばかりと思いきや、

目は、爛々と紅い。

（アルビノかな…それとも、なぜか色素が薄くなったのかな……白
髪？）

ともかく、

外見も恐ろしい。

能力も、恐ろしい。

そんなやつに、挑むのか…

死ぬかな…

（怖いな…また死ぬのは。）

暗闇に落ちていく感じ…

怖い、怖い、怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
 怖い怖い怖い怖い怖い。
 怖い怖い怖い。

でも、俺が頑張らないといけない……上条さんが来るまで。

そうしないと、妹達が死ぬ。

死ぬのは怖い、
だけど、死なせたくない。

だから、挑む。そして、生き残る…妹達と共に。

「ふう、よし行く…ミサカさん。」

君の作戦で行こう。」

ずっと俺を見ていた彼女、思うことはたくさんあると思う。

実際、彼女にいろいろ聞かれた。

何故居るのかとか、貴方は誰とか。

でも、それはあとから……

生き残ってからにしたい。

「はい、では、実験を再開します、とミサ力は、

所定の位置に着きます。

「絶対に生き残るよ……私達は。」

絶対に生き残ってやる！

S
i
d
e

e
n
d

6話 一方通行 アクセラレータ 前篇（後書き）

妹達の喋り方って、これでよかったですかね？

やっと、戦闘シーンに入ります。

初めてなので、そこをご理解いただければ…

感想お待ちしております。

7話 一方通行——アクセラレータ 後篇（前書き）

長くなりました。

でもあまりよくありません。

それでもよければ……どうぞ

7話 一方通行 | アクセラレータ 後篇

Side ユウ

「何だよ何だ何ですかア？」

あんなだけ啖呵きつてた癖に逃げんのかよ…
もつと楽しませろよ！」

「うるせえ、クソ白髪もやし野郎！」

「あ？欠陥品が調子乗ってんじゃねエよ！」

俺は バックステップで距離をとりながら、
一方通行を挑発する。

俺の役は、すこし攻撃しつつ、一方通行の意識を
多くこちらにひくようにする囷役だ。

俺が囷役をしている一方、ミサカ10032号さんは、
電気の扱いが俺より上手だから、
すこし避けつつ、オゾンに変えていく作業をしている。
この作戦は、元から考えていたそうだ。

「ハア、ハア…糞、逃げ回りやがって…うぜエ。」

だんだん効果が出てきたみたい。

「もう疲れたか？ いい様だなモヤシ！」

「くそが、速攻殺してや……ああ？」

？

急におとなしくなった…もう酸欠状態？
なら、あともうすこしだな。

（よし、勝て…「ああ、なるほどなるほど。そおいうことかア…」

また元気になった…

こいつ、本当に人間？

「ハッ！いいねいいね、最っ高だねエオマエラ。

酸素原子をオゾンにしてるって訳力ヨ…

ははっ、退屈しねエな、

流石に一万回もぶっ殺されてりゃ悪知恵の一つでも働く
ってかア！」

やばい、もうばれた！

どうすればいい…

考える俺！

「さて、まずは……そっちのお邪魔な真面目ちゃんから遊んでやる
よオ。」

そう言い、一方通行は素早く、ミサカ10032号さんの方向へ
と跳び、

彼女の目の前に立った。

（くそ、動け俺、動くんのだ！彼女を助けるんだ、彼女達を！！）

恐怖で動かない体。

ばれて、殺されることを恐れる俺…

(逃げればいい。そうしたら、生き続ける…)

ふざけるな。

何のためにここに来た。

なぜ、この戦いに参加した。

妹達を助けるため……

それだけ。

だから…

「喰らいやがれ、一方通行！」

奴の下へかけていき、懐へと入る。

それから、俺の右手を顔に向けてから、

電撃の光で隙を作り、ミサカ10032号さんを助ける。

俺が考えた助けるための作戦。

(奴だって、人間だ。突然の光で、一瞬怯むはずだ。その隙に助ける…)

自分でも驚く。

覚悟をした瞬間に突然思いついた。

どうしてかは、分からない。

神様がくれた？

神様が人を助けるなら、戦争だって起きないだろう。

俺にとって、そんな神様など関係ない。

俺は、最大出力の電気を掌に出す……

はずだった。

「クク、罨にはまってくれて、ありがとオ！

お礼にじっくり遊んでやるよオ！」

俺の腕を誰かの手が掴む。

その手を見る。

その手は、透き通るような白さに

女の子のような、細い指。

その手の持ち主は…

口が裂けるような笑みの一方通行。

（やばい…絶対殺される！）

殺される恐怖に俺は、とっさに目を閉じた…

そして、

何も起きない。

奴は「あらゆるベクトルを扱う」能力だから、
そのまま血とかを逆流させたりするのだろうと
思っていたが、ちがうのか？

もしかして、

(上条さんが助けに来てくれた?)

そつと、目を開けてみた。

そこには、鼻先1cmぐらいまで顔を近づけた一方通行の顔。

「残っ念でした、希望なんてねエよ!」

引き裂いた笑顔が視界いっぱいに広がる。

そして、そのまま俺の腹へと膝蹴りが来る。

S i d e e n d

S i d e アクセラレータ

「う、はっ…!?!」

俺は、この欠陥品の失敗品に対して、

すこしベクトルを変化させて、腹に向けて膝蹴りをしたら、
顔が悲痛の顔に変わって、そのまま胃のものと血を吐き出す。
いい様だ。

「おーおー、S心が疼くいい顔になりやがって。

もう、イッちまったか? まだ遊び足りないぜエ!」

さて、

少々時間を喰ったが、予定通りじっくり殺そう。

どんな顔になるやら…

諦めないようとしな顔？

絶望した顔？

(なんでもいい、コイツのいろんな顔を見てみてエ。)

跪く失敗品の腹をもう一度蹴ろう思って、

右足を振り上げたが、

電撃が来た……

「貴方の相手は、このミサカです、と

ミサカは一方通行に告げ……！！、きゃああ！」

電撃をそのまま空へと反射してから、

乱造品を風のベクトルで、コンテナに叩きつける……

多分、気絶しただろう……

今は、こちらに集中したい。

邪魔するのが居なくなっただので蹴るのことに専念する
蹴る、蹴る、蹴る。

「が、アア、がア……！」

もう弱ってるのか……

「もうちょっと、抵抗しろよ。」

つまんねエな。」

「あ……」

失敗品が何かを見ている。

（何を見てんだア？ もう走馬灯でも見て……アア、そういうことか）

「……、おい。この場合、『実験』って、どオなるんだ？」

俺の後ろに、一人の男が居た…

「……離れるよ、テメエ」

7話 一方通行 | アクセラレータ 後篇（後書き）

どうでしたか？

どうかえるか、考えた結果、

御坂妹をあまり怪我をさせないという結果に終わりました…

すこし質問で、

あまり変わりませんが、

上条さんと一方通行の戦闘を書いたほうがいいですかね？

感想、お待ちしております。

8話

御坂妹（前書き）

すごく短めです。

次に、上条さんvs一方通行です。

8話 御坂妹

Side 上条

青い光が消えた。

（な、まさか……いや、そんなはずはない。）

それだけでは、あいつらが殺されたと言えない。
今は逃げているだけかもしれない。

（生きてるはずだ……間に合ってくれ！）

俺は、コンテナの間を駆け抜けて、
電気が見えたところへと行く。

「はぁ、はぁ……くそ、何処だ!？」

目印がない中、探していたが
ユウも、御坂妹も、
そして、一方通行も見つからない。

「まさか……間に合わなかったのか……」

そうだとすると、
彼女達は死んだことになる。
そんなのだめだ。

（俺は、助けるんだ。御坂も、ユウも、あいつ等も！）

当ても無く走る。

走る、走る、走る……

コンテナの間を走り抜けると、
開けた場所へと着いた。

すると、出たすぐのところに

茶髪の少女が倒れている。

御坂妹だ……頭から血が出ている…

すぐさま、俺は彼女に駆け寄る。

「おい、大丈夫か！？しつかりしろ！」

御坂妹を揺すりながら、言う。

「…ん、く。」

よかった、生きてる。

御坂妹は頭の傷以外、あまり怪我してないようだが、
気絶している、頭を強打したのだろう…

そう考えてるうちに御坂妹は、

ハッ！と目覚めた。

「……ユウさん！」

（！ユウに何かあったのか！？）

御坂妹の落ち着きようの無さから、
ユウが大変だと勘付いた。

「ユウは、どこにいる!？」

「左35。の方角、100m先にいます、とミサカは、焦りつつも貴方に教えます。」

左を見る……

そこには、遠くからでも分かる白い髪……あれが一方通行。

「わかった、ここで待っている。」

ユウは、俺が助ける!」

御坂妹だって、怪我をしている。

無理に参戦してもらわないほうがいい。

「いいえ、ミサカがいきます、とミサカは

再度、一方通行に挑みます。

ミサカは替わりがいくらでもあります、

あなたこそ、待っていてください、とミサカは

替えができない貴方に言います。」

何を言っているんだ？

「ミサカは、単価18万円にして、在庫9968も余りのあるモノ、と

ミサカは説明します。

ユウさんも、人格から違います……ミサカ達とは違い、

もう一人の人間ですから、彼女も替えることもできません、と

ミサカは、続けて説明します。

ですから、替わりがいくらでもあるミサカが死んでも、問題ありま「そんなもん、関係ねえ！」え…？」

関係ない、俺達は

「俺も、ユウもそんなの関係ねえんだよ！

俺達はお前を助けるために戦ってるんだ！

替りがいくらでもきくとか、単価18万円とか、そんなこと、どうでも良い！」

俺は俺、御坂妹も御坂妹である。

「お前は、世界でたった一人しかいねえだろうが！」

俺はそう思う。

御坂妹は、モノではない。

人間だ、生き物だ……

生き物に同じのなんていない。

「勝手に死ぬんじゃないぞ。おまえにはまだ文句が山ほど残ってるんだ

お前は黙ってそこで見てろ。」

アイツを、

ユウを助けに行く。

そして、

「俺が一方通行をぶっ飛ばす…！」

S
i
d
e

E
N
D

8話

御坂妹（後書き）

どうでしたか？

とりあえず、必要だと思い、
ここも書きました。

感想、お待ちしております。

妹達編 エピソード（前書き）

おかしい点が多いかもしれませんが、
どうぞお楽しみください。

妹達編 エピソード

side 上条

「おいおい、今日はイレギュラーが多いなア……」

次は、完全な一般人ですかア？」

目の前の男、一方通行がなにか、興ざめしたという感じに呟く。
俺は、奴の背中の方こうにいるユウを見る。

見えるところには傷がないが、

口からは血が出ており、

呻きをあげながら、苦痛の顔をしている。

おそろくだが、御坂妹よりもひどいだろう……
元からあった怒りがさらにこみ上げてくる。

「離れろつつってんだろ、聞こえねえのか。」

それでも奴は、『俺』に興味がないのか、
一人で呟く。

「どうすんだよこれ。『実験』の秘密を知った一般人の口を封じる、
とかってエお決まりの展開かア？ くそ、後味悪
いな。」

なんせ使い捨ての人形じゃなくてマジモンの一般……

「ぐちゃぐちゃ言ってねえで離れろつつってんだろ、三
下……」

一方通行に対して、俺は啖呵を切った。

S i d e e n d

S i d e ユウ

目の前が暗転した中、

「おにいちゃん、ねえおにいちゃんってば!」

妹 美晴の甘い声が聞こえる……

何故だろうか、この世界には美晴は居ないはずだ……

「起きてって、おにいちゃん!」

やはり聞こえる……

(夢だったのだろうか……)

それならば、悪い夢だ。

死んでから別の世界に行き、勝手に人の体を奪い取った。

それに加えて、また死に掛ける……

(……あれは夢なのか?)

とりあえず起きよう。

「…………おはよう、美晴。」

笑顔になって、美晴に言う。

「やっとおきた〜、もうお寝坊なおにいちゃん！」

可愛い美晴の顔……

癒される……

その素敵な空間を邪魔するように、呼び鈴になる。

『ピンポン』

「ハア…………誰だろう？行ってくるね、美晴。」

「うん、いつてらっしゃい！」

笑顔で返事してくれる……

（まったく、だれだろうか…………友達とかだったら一発殴ってやる。）

少々危ないが、大丈夫だろう。

俺はそう思いながら、玄関を開けると……

「なにをしているのですか？ と御坂10039号は

玄関を開けるのが遅いあなたに対して、少々苛つきを覚えます。」

ミサカさんが立っていた。
どういうことだろうか……

(……あ、ミサカ 10039号って、俺が乗っ取ってしまった娘じゃないか)

もしかして、
こっちが夢？

そう思った瞬間、
俺はそのまま、玄関の床に倒れた。

「いつてらっしゃい、おにいちゃん……」

白く染まる中、美晴がそう言った気がした……

知らない天井だ……

白い天井が目の前に広がっている……
病院だろうか。

「っということは……こっちが現実？」

悲しい。

「あ、『実験』は終わったのかな？」

そうであってほしい、そうでなければ、
ここまでなった意味がない。

ここで一つ疑問が湧いてきた。

（『実験』は終わったら、妹達はどうなるんだろう？）

『作られた』彼女たちは、『実験』のモルモットと同じ扱いだ
った……

なら、どうなる？

心配になってくる……

「大丈夫かな……、どうしよう。」

「あ、起きてる……体、大丈夫？」

ドアが開く音と共に、一人の少女が言った。

妹達と同じ顔が見えるが、

その顔は疲労の色がありながら、心配してる顔をしている……

「えっと、あの、その……」

「あ、え、ごめん。私のこと、知らなかったわね。

私は、御坂 美琴っていうの。」

御坂 美琴……

妹達の元になった人、学園都市第三位の超電磁砲。

そして、彼女達を助けたいと思っていた人。

「えっと、その……ユウです。」

……あ、ミサカ10032号さんは大丈夫ですか!？」

飛ばされてから、コンテナにぶつかった。

怪我をしているはずだ……打ち所が悪ければ……

急に大声で叫んだせいか、咳をしてしまった。

「お、落ち着いて……」

あの娘は大丈夫だから。

だから、落ち着きなさい。」

「ほっ、そうですか……安心しました。」

なら、いい。

彼女が死んだら、意味がない。

それから、御坂さんが申し訳ないと言わんばかりの悲しい顔になり、

「その……彼女たちを助けてようとしてくれてありがとう……」

そして、ごめんなさい。

そんな大怪我させちゃって……本当にごめんなさい。」

御坂さんは、なぜか頭を下げて、俺に謝る。

どうしてだろう？

「別にあなたのせいではありませんから、謝らなくても。」

私が好きでやったことですし……
だから、顔を上げてください。」

「でも、あいつが来なかったら……」

それでも、あげない御坂さん。

「私は、上条さんが来るのを信じていましたから……
ほら、顔を上げてください。」

やっと頭を上げた。

その頭を俺は、手をおき、撫でながら言う。

「そんな悲しそうな顔しないでください、女の子は笑顔が一番ですよ。」

……あ、じゃあ、あなたがそれでも自分が悪いというなら、

お願いがあります。」

撫でられたことに恥ずかしいのか、赤面してる御坂さんが返事を返して、

「うん、言つて。」

俺が思いついたのは……

「私の前では、悲しい顔をしないでください。」

私が心配でもです。それと……」

「うん、それと？」

もう一つあるが、これはすこし恥ずかしい……
むしろ、御坂さんが嫌がるかもしれないけど。

御坂さんが顔を紅くした次は、俺が赤面しながら言う。

「あの、その……」

いやなら、いいんですけど……

その、私と……友達になってくれませんか？」

これは、俺の我儘……

断られても仕方ない。

（俺だったら……嫌がるかもしれない）

でも、

一人は辛い。

「え……」

彼女の驚き共に顔を伏せる。

（やっぱり、いやだろうな……）

「いいわよ、そのくらい……」

よろしくね……ユウ。」

「え、あ……ありがとうございます。」

彼女は笑顔でそう答えてくれた……。

こちらに来て、初の友達ができた。

あ、青髪さんはお兄ちゃんみたいなものです。

妹達編 エピソード（後書き）

どうでしたか？

美琴の喋り方は合ってますか？

あ、上条さんと一方通行のバトルは
これから変わらないので、
飛ばしました。

追記：悪い点があれば、文章の最初から書き直します。

それと、第二主人公のプロフィールを先に乗せようと
考えていますが、いいと思いますか？

PROLOG (前書き)

最近、忙しくて更新できてない上に
あまり調子が出ていないため、
今回は駄文だと思います。
それでもよろしい方はどうぞ、お読みください……

PROLOG

九月十八日。

夕日が空を紅に染める時間帯、
一人、路地裏にいた。

「……もしもし、なんか用ですか？」

面倒くさそうな少年の声が路地裏に響く。

少年は、高校生ぐらいになったばかりのような少年の姿をしている。

彼は、携帯電話を持って通話していた。

「へえ、そうなんですか……で、どのくらいですか？」

興味を持つことができる内容だったのだろう。

少年は最初、面倒くさそうな態度から一変、
快く受け答えていた。

「え、そんなに？ありがとうございます！頑張ります！」

どうやら予想外のことだ驚いたが、『電話相手』に対して、
感謝しているみたいだ。

「はい、構いませんよ……はい、では！」

テンションが高いまま、少年は通話をやめる。
そして、足取り軽く路地裏を歩いていく。

- - -
- - -
- - -

Side ユウ

「もしもし、青髪さん。ユウです。」

『おお、ユウちゃんかいなあ。』「な！女の子だと！」

「にやんだと！この裏切り者！」

「いいぜ、てめえがそんな幻想を抱いているなら、

まずはその幻想をぶち殺す！」

やかま

しいわ！黙つとき！」

青髪さん、友達となんか話しているようだ。

もしかして、明日からある『大覇星祭』のことについてかな？
外出許可を貰ったから、青髪さんとどこか歩いてみようかなと
思ったけど……

『「え、本当に女の子かにや」……

もしかして男の娘だったりするかもしれないぜい。」

そんな訳あるかい！……、ないよね？」

忙しいみたいだ……

また今度にしようかな

「えっと……あの、明日からある『大覇星祭』で

お暇だったなら、一緒に学園都市を回ってもらおう
と思って

電話をかけたのですが……お邪魔ですよ？すみません。」

『え、いや、むしろ大歓迎やで！

いやなあ、ただ後ろにむさい男たちが群がってなあ…

「むさい男とはなんだ、180cmも超えるでかさを持

つ男が

言えることかよ。」

「そうだにゃー、青髪ピラスだけには言われたくない
ぜい。」

……外野は放っておいて、どこで集まるんや？」

あれ？友達の方はいいのかな？

まあいいかな……

さて、何処にしようかな……

「じゃあ……第七学区の私達があつた公園でいいですね？」

『分かったわ。じゃあ、公園でね、バイバイ。』

「はい、また明日。」

青髪さんと約束して、通話を切る。

安心した。もしも、タイミングが悪くて嫌われたら、

どうしようかと思っていたが、

大丈夫みたいだ……

安心した矢先、一つ問題点が浮き上がった……

服装どうしよう……

困った……

体育祭みたいなものだから、体操服じゃないといけないかも。

「先生に頼んで、どうにかしてもらおうかな……」

先生……

学園都市にいる妹達の『調整』をやっている、カエル顔のお医者さんだ。

御坂 美琴こと、俺命名「ミコちゃん」によると、ゲコ太？っていうキャラに似ているらしい……

その先生に頼んで、貰えるように出来るかな……
流石に無理かもしれない。

常盤台の制服はなぜか、用意できてるけど、
急には準備が出来ないだろうな……

「一応きいてみようと……」

不安と楽しみで心が一杯だ。

S i d e e n d

「いいなあ、ミサカもいきたい！って、ミサカはミサカは
見たことない『大覇星祭』に期待を膨らませてみ
たり！」

PROLOG (後書き)

どうでしたか？

一つ考えていることを言えば、
妹達編が終わったすぐ、または数日たったぐらいの場面も出したほう
がいいでしょうか？

ご感想、ご意見、お待ちしております。

1話 女の子（前書き）

大分遅くなりました……

しかも、駄文だと思います。

それでもよろしければ、どうぞ。

1話 女の子

Side ユウ

返事はそつけなく返ってきた……

「ん？問題ないよ？僕の患者が必要とあらばどんなものでも用意するよ」

そう言ってから、何処かに内線で通話を始めた。

この人って、何者だろうか？

今さっき、常盤台中学の体操服を頼んだすぐに準備してくれるって……

なんかこの人にも迷惑かけすぎているな。

「あの、すいません……なんかいろいろ迷惑かけてしまっ……」

俺の周りの人って、いい人ばかりだな……

このお医者さんに、上条さんやミコちゃん、青髪さんとか、皆、俺を助けてくれるいい人たちばかり……

……

恩返しとか……できないのかな。

いろいろと考えていたら、どうやら話が終わったようだ。

「じゃあ、朝、病室に置いておくね？」

やっぱり早いな。

「いつもお世話になっているのに、こんな所まで迷惑かけてすいません。」

『調整』から身の回りのことまで、この病院の人たちに迷惑をかけてばかりだ。

こんな言葉だけでは足りないくらいだ。

「いいよ？君は僕の患者なんだから」

この人、いつもこんなこと言ってる気がするな……

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

朝、起きたら、

ベットの隣にあるいすの上に体操服が置いてあった……

あのお医者さんが準備してくれたものであろう。

俺はお医者さんに感謝しつつ、

外に出る準備を始めた。

そういうば、着替えるのに躊躇しなくなったと思う。

最初の頃は結構恥ずかしがっていたけど、

現在ではすっかり慣れてしまっている。

たった数ヶ月で慣れてしまっているということ……

俺の心がだんだんと女の子になってきている傾向なのだろうか？

「まあ……関係ないか」

俺が男でも、女でも関係ない。

俺は俺。

それだけだ。

考えながら、準備を終えた俺は、
病室から出て行った……

S i d e e n d

S i d e 妹達

「目標、病院から外出しました、とミサカ13577号は

他のミサカに通達します」

（彼女を追いかけますか？とミサカ19090号は

彼女のこと

を 心配しつつ、提案します）

（あなたは親ばかですかと、ミサカ10032号は

内心心配しつつ、ミサカ190

90号の提案に反対の意見を出します）

（第一、 彼女はミサカたちが接近したら、気づくかと思います、とミサカ13577号は冷静に判断します）

（彼女が気づいた場合、追いかけていたミサカを誘う可能性があり
ます、と

ミサカ10032号は彼女の行動
パターンを発言します）

（……ですが、もしも彼女が悪い男に捕まったりしたりする場合も
考えら

れます、とミサカ19090号は

彼女に新たな脅威が迫る可能
性に対して、危機感を抱きます）

（考えすぎだと思えます、とミサカ10032号は

否定しつつも、彼女の心配をしま
す）

（あなたは、親ばかりですか？とミサカ13577号は

彼女の能力があれば、安全か
と考えます）

（そ、そうですねと、ミサカ19090号は

ミサカ13577号の発言によ
り安心します）

（そういえば、彼女が会う相手は男では？と、ミサカ10032号は
思い出したように他のミサカに伝え
ます）

（たしか、彼女が言うには『俺のお兄ちゃんみたいなもの』らしいです、と

ミサカ13577号は彼女が前に
言っていたことを思い出します）

（はっ、その男が脅威になる可能性があるのでは！？とミサカ19090号は

再び、焦り始めます）

（その男は『兄』というカテゴリーということになるのでは？と
ミサカ10032号は記憶している事
をそのまま出してみます）

（で、ですが、男は皮をかぶった狼なのでは！？とミサカ19090号は

今にも彼女を追いかけた

くなってきました！）

（落ち着いてくださいとミサカ13577号は
ミサカ19090号の親ばかりに驚きます）

（今から行っても遅いでしょうと、ミサカ10032号は
そう発言しつつも、心配になってきました）

「あなたもですか、とミサカ13577号は
感染したか分かりませんが、ミサカも心配にな
ってきました」

S
i
d
e

e
n
d

1話 女の子（後書き）

どうでしたか？

最近忙しくて、あまり更新ができませんでした。
すみません。

今後も、このようなことが続きます。

そのため、この小説を読んでくださる方々にはまたせるかもしれない
ませんが、

頑張りますので、今後ともよろしく願います。

感想、ご意見をお待ちしております。

2話 対策（前書き）

駄文になっております。

それでも宜しければ、どうぞ……

2話 対策

side ユウ

待ち合わせの時間には、まだ時間がある。

「まだ……だな。なにしようかな？」

青髪さんの高校は知らないので、応援には行けない……

お金もあまり使いたくない。

どうするべきか……困ったな。

「このまま歩いていても、日射病とかになりそうだし……

どこかの店にでもはいつ

とこうかな。」

店の人には迷惑だと思うが、日射病や熱中症にならないための対処と妥協してもらおう。

「さてと、そこら辺に開いてる店はあるかな……

……ん？

どうしたんだろう？」

店を探してみると、なんか騒がしい声が聞こえた。

なんか、喧嘩とかかな？

「こっ、殺す！生きて帰れると思うなですよー！

それにしてもお姉様まで、公衆の面前で

あんなに頬を染めてしまっただなんて！

悔しいっただらありやしませんわーっ！！」

「ちょ、待つ、白井さん！！

落ち着いてくださいっていうかどうしてそれだけの

深手を負っているのに立ち上がれるんですか！！

ここは少年漫画的ガッツを

見せるような場面でもありませんってばーっ！！」

俺から見えるのは、

荒ぶるツインテールの女の子と頭にすごい花飾りをした女の子が
言い争い？していた。

（仲裁に入ったほうがいいんだろうか？）

ツインテールの女の子は、包帯を巻いている……

大きな怪我をしたのだろう。車椅子を使ってるようだ。

そして、多分それを連れ出したのが花飾りの女の子だと思う。

いい子だと思う。

病院で一人、外を眺めていては楽しくないだろう。

それを思っ、連れ出したのだろう。

ここまで、仲がいいんだ。

喧嘩して、どちらもいやな気持ちになるのはだめだろう……

とりあえず、仲裁してみよう。

「あゝ、どうしたんですか？

周りの皆さんが驚いていますよ？」

二人に声をかけてみたが、それが驚いたことに

「え、あれ、御坂さん！？　今さっき画面に出ていたのに、

ど

うしてここに！？」

「お、お姉様！？」

あ、あれ？まさか、ミコちゃんの知り合い？
ちょっとやばいかもしれない。

「え、あ、その……」

ビックリして口籠ってしまふ。
動揺しまくって、うまく喋れない……

「お姉様？どうしたのですの？」

顔が青ざめてますわよ！？」

やばい、顔に出ているようだ。
ちゃんと対策したことを言わないと、

「わ、私は……」

「私は？」

言え、俺。頑張れ俺！

「ミコちゃんの親戚でしゅ!」

……噛んだ。

S
i
d
e

e
n
d

2話 対策（後書き）

どうでしたか？

黒子の喋り方、難しいですね。
すこし、練習してみます。

感想、ご意見お待ちしております。

3話 お姉様（前書き）

大変お待たせしました。

すこし用事が込み合いました……

あまり書く暇がありませんでした。

これから遅くなるかもしれませんが、
今後ともよろしく願います。

では、駄文ながら、どうぞ……

3話 お姉様

Side 黒子

「ミコちゃんの親戚でしゅ!~!」

「ぶはあ!~?」

可愛いすぎる、なんだろうかこの生き物。
で、でしゅ……なんという可愛い噛み方……
しかも、噛んだ後の仕草も、

顔を真っ赤にして、すこし涙目になりつつ、
その上、パニックで混乱している姿はまるで、
親と離れた子供のよう……興奮が止まらない。

「だ、大丈夫ですか、白井さん!~?」

初春がなにか言っているが、そんなこと頭に入らない。

私の頭は、目の前の可愛いお姉様の親戚(?)らしい女性のこと
ことで

いっぱいだ。

しかも、この少女はとてもお姉様に似ている。
よって私の視界に映るのは、まるでお姉様が
恥ずかしがっているようにしか見えない。

むしろ、お姉様だ。

そうだ、お姉様だ。

私はこの気持ちをお姉様に伝えるために、愛の抱擁をする……

「か……可愛いですわ〜!!お姉様〜!!」

「わ!え、なに、どうしたの!？」

いつもみたいに電撃で愛のムチをあたえず、
動揺するお姉様も可愛い!

ああ、こんなお姉様見たことない!

「お姉様、ああお姉様、お姉様!!」

「この娘、大丈夫なの!?怪我してるのに、こんな力入れて」

「そ、そうですよ!白井さん、落ち着いてください!」

「ぐへへへ……はっ!私としたことが!」

そうだ、今することは!

「このお姉様のお姿を写真に収めること!!」

S i d e e n d

[illegible]Side
ユウ

十分ぐらい経ち、
なんだか興奮していた少女がやっと落ち着いてくれた。

「本当に失礼致しました……」

「あ、いえ、落ち着いてくれてありがとうございます」

今、俺達は近くにあったファミレスで、休憩している。

ファミレスの中は、まだ昼休みでもないが、“外”から来ている人が結構居た。

「私の名前は、白井 黒子ですわ。よろしくお願いします」

「あ、えっと、私は初春飾利です。」

ツインテールの女の子が白井さんで、
花飾り(?)をつけているのが初春さんか……
俺も自己紹介返さないと……

あれ、どうしよう……苗字考えてなかった……
やばいかも。

「あの……お名前はなんですか?」

白井さんに聞かれた、更に焦る。
……こうなったら、

「た……高橋 ユウです。ユウでいいです……」

「ユウさん、よろしくお願いしますの」

なんとか誤魔化せた……
大丈夫そうだ。

「えっと……それで、御坂さんとは親戚でしたよね?」

「あ、はいそうです」

そういう設定だ。

「でも、私は同じ常盤台中なのに、ユウさんのこと知りませんの……」

えっと、こういう場合は……

「お……うっうん、私はちょっと体が弱くて……」

学校行ってないんです。

だ、だから今日は……ちょっとでも学生生活を楽しみたくて……」

さっきから嘘をついてばかりだが、
学生に戻りたいという気持ちは、ずっとある。

「そうでしたの……では、その体操服はお姉さまなの？」

実際は、お医者さんに準備してもらった物だが……

「え、はい……そうです」

俺はすこし落ち着くために、頼んだオレンジジュースをゆっくり飲む。

「……初春、ちょっと……」

「はい、どうしましたか……はい……はい……」

なんか二人で話している……
もしかして、嘘だとばれた？

「あ、あ、あのどうしましたか？」

やばい、声が震えてる……

「ユウさん……今からお暇ですの？」

まさかこの学園都市で警察の代わりをしている警備員に
突き出すとか……

「え、あ、その……」

動揺しすぎて、声すら正しくだせない。

このままだったら、きっと悪い状況になるかも……

「私達と一緒にまわりませんか？」

どうやら切り抜けたようだ……

s i d e e n d

3話 お姉様（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。
黒子の喋り方、合っていたでしょうか？
個人的には、このような感じです。

ご感想、ご指摘、お待ちしております。

4話 白井黒子（前書き）

駄文ですが、
どうぞ……

4話 白井黒子

S i d e ユウ

俺は白井さんたちの提案を承諾して、
青髪さんと会う約束をした第五学区の公園に向かいつつ、
露天で買ったり、食べたりしている。

露天であつたバニラ味のソフトクリームを食べていたら、
白井さんが聞いてきた。

「たしか、ユウさんと待ち合わせをしている方って、
殿方の方ですわよね？」

白井さんたちには、
『公園で男の人と待ち合わせしている』と言っただけ。
何か疑問でも湧いたのかな？

「うん、本名は知らないけど、

私は“青髪さん”って呼んでますよ」

青髪さん、何で教えてくれないのだろうか？
不思議だな。

「え、大丈夫ですか、それ？悪い人とかじゃありませんか？」

初春さん、俺が青髪さんの本名を知らないから、心配してくれるのかな？

「でも、やさしい人ですよ？」

俺がこの世界にやって来て、

他人の俺にも優しくしてくれたとても親切な人。

入院して、一時経ったあとから電話で話したりしている。

「そういう人に限って、本性を隠して接したりするのですわ！

ユウさんは、本当に可愛らしいお姿をなさっていらっしゃるから、

余計に危ないですよ！」

白井さん、俺の心配してくれてるなんて、いい人なんだな。

俺も見習わないと……

「青髪さんって、悪い人には見えませんよ？

見たら分かると思うけど……」

「そ、そうですの？」

ユウさんが大丈夫っておっしゃるなら、

黒子は気にしませんの……」

すこし残念がつてる……

俺に話が伝わらないと思ったからかな？

不安がらないような笑顔をしながら、

「白井さん、心配してくれてありがとう。」

初春さんも、ありがとう」

「は、はう！？」

わ、わたくしは、お姉様という存在がいるのに、

ユウさんにも心惹かれていく……

ああ、お姉様……こんな黒子を許してください

「まし！」

「えっ、と、うちうち……」

恥ずかしながら返事をしてくれた初春さんとなぜか、一人ぶつぶつと呟いている白井さん……

白井さん、またどうしたんだらうか？

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

その後、待ち合わせ場所の公園に着いたすぐに、青髪さんがやってきた。

「ユウちゃん、またしてもうたか？」

相変わらずの笑顔で、接してくれてる青髪さん……

いつもテンション高いな。

「いえいえ、今来たばかりですよ」

本当に今着たばかりだ。

ずっと話しながら来た為、

時間も忘れていたのかもしれない……

気をつけないと……

「ん？その女の子達は、友達かいな？」

「あ、はい……初春です。で、

こちらは……白井さんです……」

初対面のためか、警戒気味の初春さんと

物凄く笑顔な白井さん……なんでそんなに笑顔に？

「どうも、よろしく願いしますね」

そういつた瞬間、彼女はそこから消えた……

あ、あれ……どこにいった！？

と思ったが、いつの間にか青髪さんの隣に居て、

青髪さんに小声で話している……

あれも、能力なのかな？

能力的には瞬間移動かな。

まあ、いいや……

なぜか本人の髪の色のように顔を青くしている青髪さんから
離れて、時計を確認してから白井さんは初春さんに言う。

「では、初春……そろそろ戻りましょう。

もうお昼ですの」

「あ、はい。

じゃ、じゃあ、ユウさん、青髪さん……また会いましょうね?。」

「では、ユウさん、青髪さん……ごきげんようですの」

「ビックウー!？」

?

なんで青髪さん、びくびくしているのかな？
なにか言われたのかな……

「またね、白井さん、初春さん」

自然と笑顔でお別れをした。
ここまで楽しかったかな？
また会いたいな……

俺は、なぜか空を見ながら去っていく白井さんと
車椅子を押す初春さんを見送って、青髪さんに話しかける。

「じゃあ、行きましょうか?……どうしたんですか?。」

そこにはまだびくびくしている青髪さんの姿があった。

S i d e 青髪ピアス

ボクは、こっそり呟く

「最近の女の子、こわいわぁ」

なんや、あのこ!?

ものすごく怖かったわ……

だって……

「もしも……ユウさんに手を出したら……」

女の子が出さないような低い声で

「その時は……」

目は殺気、体からは黒いオーラが見えた……

「貴方様の男としての尊厳を無くさせてもらいますわよ?」

あの子はそうボクに言った……

「やっぱ、ユウちゃんが最高やな……」

正直、僕の天使や……

s
i
d
e

e
n
d

4話 白井黒子（後書き）

どうでしたでしょうか？

黒子の執念って、こんな感じかなと思いながら、
今回書きました。

ご感想、ご指摘をお待ちしております。

5話 己（前書き）

すいません

夏休みになったのですが、

課外授業でまったく書くことが出来ませんでした。

いえ、これはタダの言い訳かもしれません。

加えて、あまり出来がいいとも言えません。

それでもよろしいという方は、

どうぞ……

5話 己

Side ヌウ

よく分からないけど、ビクビクしていた青髪さんがいつものテンションに直ったので、回ることにした。といっても、青髪さんは一時間ぐらいしか居られないので、公園近くをすこし回るだけである。

「そつえば、青髪さんと一緒に歩くのつて、

私とあつた以来ですよね……」

あの時はまだ混乱していて、青髪さんにいろいろ迷惑かけた覚えがある……

青髪さんに会わなかったらどうなっていたやら。

「そつやね、あの時のユウちゃんは、

子犬みたいで可愛かったわ〜。

もちろん、今もとても可愛らしいで〜!」

「はは、ありがとうございます……」

すこし苦笑いしてしまった。

……あまり“可愛い”って言われても、嬉しくないな……
やっぱり元男だからかな?

……えっと、適当に回ろつかな?

Side end

Side
青髪ピアス

すこし苦笑いしてたな……

はっ！もしか、ボクの事……気持ち悪いと思ったのかな。

いや、でも、ユウちゃんがあることと思う子とは思えへんし。

うん、そうやね。そんなこと思っていないやろうしね……

まず、嫌なら誘わへんだろうし。

うん、うん！間違いない！

「じゃあ、適当に回ろつち！」

「あ、え、はい……そうですね」

笑顔で返事をしてくれるユウちゃん、可愛いわ。

ボクは勝ち組やゝ！！

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

ボクとユウちゃんはブラブラと回って、
出店や見世物で楽しんでいるんや。

暑いんで、ボクのとユウちゃんのソフトクリームを買いに行つて、
その帰りなんやで。

暑さでぼうとしておるユウちゃんが、帰ってきておるボクを見て、
笑顔で出迎えてくれた……その笑顔で一週間幸せに過ごせるわ。

「すみません……本当だったら、私がお返しをするはずなのに……」

ボクがソフトクリームを手渡したら、
なぜか申し訳なさそうに、そう謝った……

「なんで謝る必要があるん？ボクが好きで買ってきてるんやし……」
ボクはユウちゃんが可愛く食べてくれ
たら、嬉しいんやで……！！

ほらほら、溶けてしまつやろ、はやく食べ
よう……」

ボクがそう言ったら、そうですねと言って、
嬉しそうにソフトクリームを“舐めた”。

実に良い食べ方やと思うわ……うん、マジでいいと思う。

溶けて指につかないようにするため、回しながら食べていくユウ
ちゃん……

だが、とうとう指についてしまって、先についてしまった指を舐
めていく。

その場面にボクは、自分が持っているソフトクリームが溶けはじ
めていることに気づくことができなかった……

ずっとユウちゃんを見ているボクのがきになったんやろうか、
頭の上に“？”マークをつける感じで、

「どうしたんですか……あ、もしかして顔についてしまってますか？
……うわ、いい年して、恥ずかしい
かも。」

顔を真赤にさせながら、腕で顔を拭いていく。
ちがうんや、ユウちゃん……

そんなことを言ったら、今の可愛い場面を止めてしまつかもしれ
へん……

ボクにはそんなことができへんのや！

「多分、これでいいかな？どうですか、まだついてますか？

……あ、ソフトクリーム、溶けてますよ！？
あーあ、手についてちゃってますよ……

？……本当にどうかしたんですか？

あ、もしかして熱中症とかですか！？

あ、えっと、青髪さん、大丈夫ですか！？

ええと、えっと……」

なんか、ぼうとしている間に、なんか勘違いされてしもうたみた
いや……

今にも泣きそうな顔をしていて、可愛らしいが
これ以上はだめやな……ボクも耐えれへんわ、精神面が……

「大丈夫やで、ユウちゃんの可愛らしさが目に離されんかっただけ
や！

なんてな……って、ソフトクリーム溶けている
！？いつの間に！？

ユウちゃん！手、洗ってくるわ！」

「あ、安心しました……いつてらっしやい」

本当、いい子だわ。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「すみません、なんか殆ど買ってもらってしまつて……」

本当なら、私が恩返しするはずだったのに。うう

§
L

「うん？ 気にせんでいいやで？」

ボクはユウちゃんの笑顔が、もっとも嬉しいやか

5!

ユウちゃんの笑顔を見ると、

日々の何処かのフラグメーカーさんに対して、

嫉妬の心とか、清らかになっていくような感じや。

これだったら、一ヶ月は持つやろうな。

だが、

残念ながら、ボクには競技があるんや……
こもえセンサーのための戦いがあるんや！

「じゃあ、そろそろ競技があるから、

ほな、バイバイ〜！」

「はい、よかったらまた一緒に……」

ユウちゃんも楽しんできたようで、良かったわ……
やっぱ、もうちょっと居ってよかったかも。

……いや、別に本気で、競技をすっぱかそうとか、
思っておらんて……うん。

S i d e e n d

「うーん、これからどうしよう……帰ろうかな？」

どうせやることないし。

あ……“妹達”にお土産でも買ってこようかな？
今日、確か外に出ないって言っていた気がする。
何が好きかな？

あまいもの……りんご飴？りんご飴って、
熱で溶けたりするのかな……どうだったけ？

「まあ、適当に買っていこうかな……」

髪留めとかが いい のかな？」

俺は道を引き返すために、後ろを向いて歩き出そうとしたら、
誰かにぶつかった……

「わ！？」

ぶつかった衝撃でそのまま後ろに落ちていく……
下はコンクリート……このままだったら、絶対痛い！
どうしよう！？

もう、目を瞑るしかなかった……

と、思っていたが、

「おっと……大丈夫？」

落下が止まった……どうやら 相手の人が受け止めてくれたようだ。

助かった、死にはしないと思うけど痛いのはいやだからね。

「す、すみません。ありがとうございます」

俺はそのまま体勢を正して、頭を下げて謝ってから、
助けてくれたお礼を言った。

「いやいや、俺も悪かったから……」

男の人のようだ……でも、この声どこかで聞き覚えがある。
どこだったけ、

以前、ずっと聞いていた気がする声。

もしかして、知り合い？

俺がそっと……

顔を持ち上げていく。

相手の顔を見て、もう一度だけお礼を言おうと思い、

俺は、ちゃんと相手の顔をみた……

「え……？」

その顔は……
以前の俺。

高橋 優の顔をしていた……

「どうかした？」

その顔は、とても笑顔だった。

S
i
d
e
e
n
d

5話 己（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回、ある意味初登場の『高橋 優』です。

実はこの章は、彼のためと言っても、間違いではありません。

あと、

皆様、8月1日18時5分現在、お気に入り登録102件、誠にありがとうございます。

まさか、100件を超えるとは思っていません……

皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

この気持ちを心に持って、完結目指し頑張っていこうと思います。さて、100件越えということで、

ここはひとつ、100件越え企画という感じで、

皆様から「ユウと多分会うこともないだろう」と考えられるキャラとの組み合わせなどを募集したいと思います。

可能な限り書かせていただきます。

……実を言うと、私は20巻までしか買っていません。

というで、20巻以上のキャラの組み合わせは、

申し訳ないのですがお断りさせていただきます。

すみません。

皆様からのご応募、お待ちしております。

ご感想、ご指摘、お待ちしております。

6話 高橋 優

Side ユウ

『俺』がいる……

『俺』は、人懐っこくてやわらかい笑顔で俺を見ている。
いつもこんな顔をしていたのか？

「……ねえ、君？本当に大丈夫？」

顔が真っ青だよ？」

彼は、すこし心配そうに言う。

その顔は、変わらずやわらかい笑顔をしている。
恐怖感をわけせないためなのだろうか……

それともコレが普通なのか？

あ、返事しないと

「あ、えっと……大丈夫」

ついつい敬語忘れていたけど、いいよね？

「うーん、ちょっと心配だな」。

……よし、お兄さんがそばに居るところ！」「

……え、俺ってこんな性格だったけ？

それは置いといて、

『俺』だからって、迷惑かけちゃいけないだろうな……
断つところ。

「大丈夫です。だから、いいですよ？」

なるべく元気そうに笑顔を作る。
だけど、彼は

「いいからいいから、ね？」

笑顔のまま、俺の手を引いて歩き出す。

うわぁ、ありがた迷惑って言葉を知らないのか『俺』……

着いた先は、今日二日目のファミレス……
来る間に思考も落ち着いたようだ。

「コーラ二つ」

『俺』こと、高橋 優は、店員さんに注文を頼む……
注文を聞いた店員さんが去っていったから、彼が話しかけてくる。

「うん、体調よくなったようだね。良かった良かった」

心からそう思ってるようだ……

いい人だな『俺』

身も知らずの俺に対して、ここまで優しくするんだから……
……なんで自画自賛してるんだろうか俺。

あ、そういえば……

『俺』は、こんな暑い日なのにスーツを着ている。
暑くないのかな？

「あの……もしかして“外”から来た人ですか？」

だって学生なら、体操服を着ているはずだ……
スーツが体操服っていう可能性なんてないし……

「うん？……うん、そうだよ？友達が学園都市の学生だから、特別に招待されただよ？」

あれ？仕事じゃないのか？
なら、なんでだろう

「じゃあ、なんでスーツなんですか？

暑いんじゃない？」

こんな猛暑じゃ、倒れちゃう。

「うーんとね、趣味だよ趣味」

笑って答える彼……

趣味なら暑さにも耐えられるということか……

と話している間にコーラが二つ来た。

俺は来たコーラをストローで飲む……

「うーん、可愛い飲み方するね。」

俺なんて、ストロー使わないでそのまま飲んじやうのに……」

あれ？俺、そんな飲み方してたっけな？

……別の世界だから、俺が知らないことがあったりしたんだろうか？

ていうか、また可愛い……

苦手なんだけどな、言われるのは……

「あれ？ “可愛い” って言われるの、嫌だった？」

『俺』が残念そうに言ってる
俺、いやな顔していたのかも……

「い、いえ。嬉しいですよ！はい！」

この世界の俺だからって、迷惑かけちゃいけないだろう。
……最近、借りばかり作ってる気がする。

「そう？ならいいけど……あ？」

？

どうかしたんだろう？

「……暇ならさ、一緒に回らない？」

俺、暇だからさ」

どうしようかな……

……まだ病院の皆にお土産買う時間があるし、
回ろうかな？

「えっと、私でよければ……」

「そう！ありがとう、良かった。はは」

ずっと笑顔だな。

こんなにニコニコしていたかな？

「じゃあ、コーラ飲み終わったら、いこっか？」

彼が俺に対して、そう問うので普通に頷いた。

急にどうしたのかな？

まさか……面白くなかった！？

「あ、えーと、えっと、楽しくなかったですか！？」

「……はは、楽しいよ」

よかった。

ただの自己満足だったら、どうしようかと思ってた。

「あ」

急に思い出したように、彼は声を発した。

「ねえ、面白いところを友達から聞いたんだけど、

一緒に来る？」

面白いところ？

ここらへんにあるのかな？

行ってみようかな？

でも、迷惑じゃないかな。

「迷惑でなければ……」

「ううん、ぜんぜんOK!!」

よかった、じゃあ行こうかな。

「じゃあ、よろしく願いしますね」

彼が言う”面白いところ”に言ってる途中、聞きたい事を聞いた。

「あの、兄弟とかいますか？」

聞きたかったことの中で一番大きかったのがコレ。美晴が元気なのかどうか……

「……、いるよ。一人」

あれ？なんか違和感？

……気のせいだろうか。

「どんな子なんですか？」

「……小学生の時は、とても無垢で可愛らしかったけど、

中学生になってから、すこしだけうるさくなっ
た。

でも、可愛いよ

うわ、シスコン。

……って、彼をシスコンって言ったら、俺もシスコンか。

「もうすぐだよ」

そう言う『俺』の後について行く。

ここは昼なのに、暗い路地裏……
ジメジメしているな。

「近道でも通ってるんですか？」

「うん？……そうだよ」

近道か、なら仕方ないよね。
と、思っていたら

急に彼がこちらを向いた……

「ちょっと待って……あってるか確かめる」

彼はそう言ってから、今来た道を通っていく……

さて、どうしようかな……

ていうか、いつ帰ろうかな？

早く帰らないといけないし……

あ、そういえば、

最近来た打ち止めちゃんが行きたがっていたな、

お土産でも買っていこうかな？

何があるかな？

食べ物腐りそうだし……

やっぱり髪飾りとかがいいかな？

あはは、喜ぶ姿が目に見えな

それは突然だった。

首に何かが当てられてる感覚……

なんだろコレ？

「……あれ？効かなかった。

あ、そっか電撃使いだから効かないんだった。

ミスミス」

なにを言ってるの？

「あ、ビックリした？」

驚いたでしょう？

でも、スタンガン効かないなんて、聞いたことないな

まあ、学校なんて行った事ないから当たり前だけどね」

「ス、スタンガン？」

「そう、スタンガンスタンガン。

結構強く設定してあるやつなんだよ、これ」

「な………んで？」

なんで『俺』が？

「あ、言っ…てなかったね………」

「え、」

「俺は学園都市のフリーの暗部　　高橋　優。

君を捕獲しに来ました。

はいよろしくね、ユウちゃん？」

笑顔で言った。

俺はその笑顔で、一方通行を思い出した……

一方通行の恐ろしい笑顔じゃないのに……

あの日のような恐怖がたくさん湧いた。

6話 高橋 優（後書き）

どうでしたでしょうか？

ご感想、ご指摘お待ちしております。

7話 笑顔（前書き）

大変長い間、更新を怠ってしまい、
すいませんでした。

最近は資格の補習やテスト勉強などで、
家に帰宅するのも遅くなってしまっていて、
土日にも学校があり、頭も体も疲れてしまっていました……
まあ、こんなのは言い訳と同じですけど。
こんなダメでど素人が書くのお話でよろしい方は、
どうぞ……

7話 笑顔

Side ユウ

「あ…あ、嫌！」

俺の体に『あの日』の恐怖が駆け巡った瞬間、
彼から逃げるように身を翻して、走った……

（何だ、あの笑顔？

最初の笑顔と変わらないはずなのに

今さっきだけ、あいつ……一方通行と同じ雰囲気でした）

一方通行は、

まるで狂ったような、頭のネジが外れてしまったような……そんな
感じだった。

それがなぜか『高橋 優』にも同じような雰囲気がああ笑顔から
湧き出た。

怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
い……

あんなの俺じゃない……

一体何がどうなっているんだ。

全力で走りながらも、一瞬だけ後ろを見た。
彼は俺が逃げたことに焦った様子を見せず、

変わらない雰囲気でこちらへと歩いてきている様子が見えた……
俺が一回後ろを向いたのに気づいて、
すこし困ったような顔でポツリと言った。

「あゝ、ごめんね……」

もう一つ黙っていたことがあったよ。

ここから先、行き止まりなんだよね」

「えっ？」

行き止まり……

その言葉に俺は、足を止めてしまった。

驚きと絶望を感じながら……

それが顔に出ていたのだろう、

彼は、俺の表情を見て頭を掻きながら嫌な顔で説明を始めた。

「えっとね、ここからでるところは一箇所だけあるんだけどね。

まあ、俺が持ってきた車がそこに止めてあるからさ……」

「ごめんね、なんか期待させたみたいで」

絶体絶命……

今の状況にこの言葉が合っているのかもしれない。

もし捕まったらどうなるのだろうか？

その先には、何が待っているのだろうか？

そのまま殺される？

いやだ、なんで俺ばかりこんな目に合わないといけないんだ。

こんなところで死ぬ？

『この子』の分まで生きようとしているのに？

また、あんな真つ暗でなにも見えないあの世界にいくのか？

[illegible][illegible][illegible]

そう思った瞬間、

俺は『高橋 優』の方へと向かっていく……

「え！？ちよつと待ってよ！」

突然走ってくる俺に対して、

予想外だったのか、戸惑っている様子を見せる「俺」……

これで電撃を至近距離で出せば、
気絶や驚くことによって、隙を作ることができるだろう。

「わああああ！」

俺は「高橋 優」を殺す勢いで迫って、

一方通行の時と同じように右手を突き出した。

「あー、もうビックリだよ本当……
まあ、ドンマイ？」

君の抵抗は始まってからもう終わってたんだよ」

『高橋 優』は俺が突き出した腕を掴み、
やわらかい笑顔を向けて言った。

分からない……

俺は電撃を出すと考えたのに、
俺の腕から何も出ない……

「出る、出る、出るよお！？」

「無理だよ？」

俺の『能力停止』で一時的に君の超能力を使えなくしたからね。
……君のレベルじゃ、覆すこともできない」

あっさりと答える『高橋 優』の言葉は、
俺には、死刑と同等だった。

頼むから出てくれよ……

そう望んでも、願っても、何も出ない。

『俺が何をしたって、何も変わらない。』

その事実だけが私の体を包み、
そして、

俺は逃げるのを諦めてしまった。
体は震えるだけで、力が入らない……もう立っていることだって
無理だ。

でも、死にたくない、死にたくないんだよ……

「嫌だ…嫌だよ……」

なんで俺なんかがこんな目にあわなきゃならないんだよ

「

「そうだね。」

君は望んで生まれてきたのでもないし、
君が何か悪いことをしたのでもないね……

大人たちが『都合が悪い』や、

イかれた研究者『面白そう』と言って、
自分たちの都合を押し付けているだけだよ。

僕もそうさ……

生きるために君を犠牲にする『悪人』であり、
彼らとまったく同じ『同類』さ。

だから、君は僕を恨んでもいいだよ？」

思考が停止し、体が動かず、ただ『死にたくない』と望む俺に、
さも当たり前のように言う彼は、またやわらかい笑顔をしていた

……

s i d e e n d

7話 笑顔（後書き）

どうでしたでしょうか？

久しぶりに書いたためか、なかなかうまく書けなかったので、表現などおかしいこともあるかもしれませんが、その点などをご指摘くださると嬉しいです。

ご感想、ご指摘をお待ちしております。

最近、髪が坊主になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298s/>

とある妹達の憑依物語

2011年11月17日19時12分発行